『天池』No.332（1989 年 1 月）中国･延辺

－随筆－
高尚な魂
金学鉄

日本の神戸市に「むくげの会」という団体がある。その趣旨を見ると－本会は日本人の団体で、朝鮮（人）に対する偏見が､いまだ根深い日本社会にあって、その克服のための活動を続けている｡「むくげ」は朝鮮の有名な花の名前で、日本の植民地時代の朝鮮においてねばり強く闘われた独立運動も、むくげの花に象徴される（以下省略)。

むくげの会では、定期的に毎週火曜日ごとに集まりを持ち、また、その活動の一環として隔月刊の『むくげ通信』を刊行している。

むくげの会世話役の飛田雄一氏が最近送ってくれた『むくげ通信』を読んでみて、私は深い感銘を受けた。

読んでみると飛田氏をはじめとするむくげの会の会員たちはみな、古い日本国精神の反逆者たちであった。

日本がかつて朝鮮を植民地支配したのは、まったくの間違いであった。罪悪的であり。かつまた犯罪的であった。なのに今日に至っても朝鮮人を差別していることは、まったく不当なことだ。

このように彼らは叫んでいるのだ。

『むくげ通信』は、日本帝国主義の朝鮮植民地支配を暴露糾弾し、また朝鮮人民の英雄的な抗争をたたえる文章であふれている。

とくに私を驚かせたのは、堀内稔氏の「日帝下の元山、平壌地域における無政府主義運動」という文であった。

私は 11 歳の時、元山労働会（赤色労組）と元山青年会（無政府主義者連盟）が衝突し、一大乱闘を繰り広げたのを目撃したことがある。目撃というよりは観戦というほうがふさわしいほど、近くでその一部始終を見守った。そこで受けた印象がどれほど強烈であったか、私は 50 余年が過ぎて書いた長編小説『激情時代』に、その場面を再現させるまでした。「チョ・シウォン」という実在人物の名前はそのまま明かして使い、「キム･ジョンヒ」という実在人物の名前は「ハン・ジョンヒ」に直して使った。

堀内氏の文は、11 歳の子どもには到底理解できなかったその衝突のいきさつを－60 年が過ぎた今日になって－私の目の前に生々しくくりひろげてくれた。

むくげの会ではまた、朝鮮（人）に関する書籍を引き受けて出版しているが、その中では早稲田大学教授の大村益夫先生が翻訳した『中国の朝鮮族』（延辺朝鮮族自治州概況）も入っている。この本は豪華版の装幀本で、それ自体がまさに精巧な美術品だ。この本はは自費出版で、訳者である大村先生とむくげの会がその費用を折半して負担した。

むくげの会では日常的に朝鮮語講座、朝鮮史研究会を持ち、また、朝鮮に関する音楽、舞踊、美術、演劇、映画などもたえまなく紹介、展示、公演している。

日本の東京にはまた、「鐘声の会」という日本人の団体があるが、その趣旨もやはりむくげの会と同じく、朝鮮（人）に対する日本人の偏見に挑戦するものである。鐘声の会で刊行しているのは『スクラム』

という月刊誌であるが、スクラムというのは英語で腕を組み合って団結するという意味だ。

先日、鐘声の会の高柳俊男氏から、「時事漫画で見る日本人の朝鮮認識」という著作を贈呈されたが、その内容についていえば、『スクラム』に 12 回連載されたものを編集したものだ。65 枚の時事漫画をてなづけたその文章は、文字どおり日本人の間違った朝鮮認識に対するむち打ちであった。辛辣なむち打ち、容赦ないむち打ちであった。

とくにその中の「独立運動を敵視してつくり出した<不逞鮮人像」は、圧巻であった。「圧巻」というのは、同じ本のなかでもっともすばらしい文ということだ。私もかつてそんな<不逞鮮人のひとりだったからかもしれないが、読みながら血が沸き立つのを感じた。

高柳氏は、高等学校時代までは朝鮮問題にまったく無関心であったが、大学に入って偶然、好奇心で季刊雑誌『三千里』を購読したことから人生航路が急転し、朝鮮（人）のために奔走、献身するようになったという。高柳氏は現在、東京大学に在籍している。そして『三千里』は、日本で日本語で刊行された進歩的朝鮮人たちの総合雑誌だ。

上述した高柳氏と飛田氏は、どちらも朝鮮語を話し書くことができる。大村教授に比べると程度の差はあるかもしれないが、ともかく。

ところでここで特記すべき点は、彼らはみな「損な役回り」をしているということだ。「むくげの会」、「鐘声の会」、『むくげ通信』、『スクラム』……これらはみな営利を目的としない純奉仕的団体、純奉仕的刊行物だ。

大村先生は自分の努力、お金を使ってまで、我々の『概況』を翻訳出版しただけでなく、堂々たる大学の教授が、この本を担いであちこち売り歩くことさえした。広く知らしめるるためであった。わが中国の朝鮮民族を、日本で広く宣伝するためであった。

それなら、彼らはいったい何のためにこうした何のもうけにもならないことに、よろこんで従事しているのか。

いうまでもなくそれは、崇高な理想とそれにともなう信念の問題であろう。信念というのは、自分が体得した思想と見解に対する堅い信頼と、それを最後まで実現しようという強い志向が結びついた思想意識をいう。理由もなく差別を受ける人々に対する同情心、不当な仕打ちをする社会集団および為政者に対する敵愾心、そして正直な人間としての正義感……これらがその直接的な動機だと見て間違いないであろう。

こうした高尚な魂をもった隣国の友を、我々がどうして熱く迎えないであろうか。

米国や南アフリカで繰り広げられる黒人たちの解放運動に白人が加担し、共に闘う姿を我々はテレビのブラウン管を通して見てきた。その白人たちもやはり、高尚な魂を持った、人間らしい人間たちなのだ。大村、高柳、飛田の諸氏のような、人間らしい人間たちなのだ。

私利私欲の卑劣な人間は、我々地球の主人になることはできない。高尚な魂をもった、人間らしい人間たちだけが、我々の美しい地球の堂々とした主人なのだ。

（翻訳：堀内　稔）